2/25 朝日

バイト漬け 家計支える

子ども貧困 学校で 3

2月上旬、昼食後の5時間目。20人近い生徒の多くが睡魔と闘っていた。あくびをしたり、ほおづえをついたり。机に突っ伏している生徒もいた。

「起きやー」。担当の女性教諭(44)が一人ひとりに歩み寄り、声をかけた。「ずっと寝てたらくすぐるで」「寝過ぎて人生ドヤ顔みたいになってんで」。教材に用意したクロスワードパズルを持ちかけると、教室はにぎやかになった。

関西の全日制のこの高校は、4人に1人が生活保護世帯。終業後に夜遅くまでアルバイトをして、家計を支える生徒は少なくない。

かつて在籍していた少年もそうだった。入学当初、鋭い目つきでにらみ、大人への不信感を隠そうとしなかった。話しかけても無視された。そんな子を見ると闘志がわく。笑わせたくなる。生徒たちから「ザ・おばちゃん」と呼ばれる元お笑い芸人志望の意地だ。

毎日のように声をかけると、徐々に変化が表れた。学校に来ると「今日は来たで」と笑顔を見せるようになった。

学業断念 選ぶ

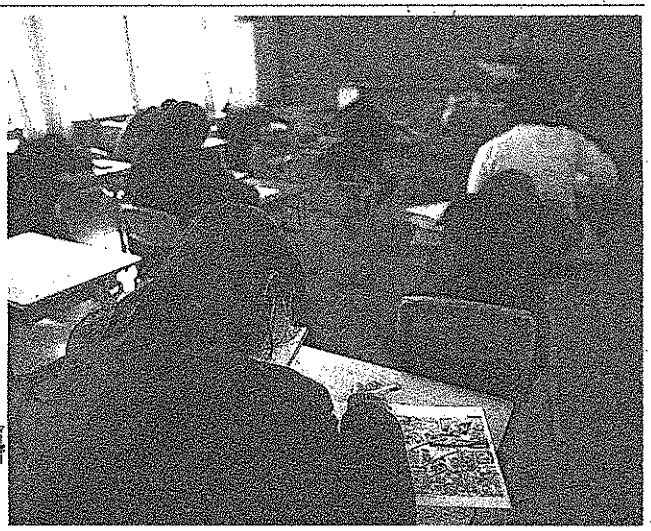
少年は、心の病と借金を抱える母と2人暮らし。ほぼ毎日、飲食店でバイトした。学校での笑顔にも疲労がにじんでいた。女性教諭は教頭、学年主任、担任、NPOのスタッフと支援策を検討。少年が欠席すれば連絡を入れ、バイトを減らすように勧めた。

少年が選んだのは、学業の断念だった。「勉強するより、働いてお母さんを支えたい」と。翻意を促したが、意思は固かった。中退したいまも、女性教諭は様子を見に夜のバイト先に顔を出す。学ぶ意欲があれば、通信制高校もある。いつでも相談にのるつもりだ。

帰宅は深夜に

現在1年生の少女(16)はバイト漬けで、たびたび遅刻する。「やる気ない度、テストしよか?」。ツッコミを入れると、笑って背筋を伸ばした。

終業後の午後3時過ぎ、少女は自転車で家路を急ぐ。私服に着替えてアルバイト先の洋食屋へ。午後10時まで店に詰め、深夜に帰る。



昼食後の5時間目。少女(手前)は眠気をこらえてペンを握った =内田光撮影

小2の時に両親が離婚。母、弟2人と祖母の借家に移り住んだ。母は昼は弁当屋、夜は居酒屋で働いた。高学年になると、弟の保育所の迎えや夕食を任された。野菜炒め、麻婆豆腐、カレーとレシピを増やしていった。時間を見つけては図書室で借りた小説を読み、あざった。中3の時は300冊以上読み、学校で表彰された。

高校に入るとすぐに働き始めた。週4日、5時間。祖母が膵臓がんを患い、家の出費がかさんだ。バイト代は携帯電話代に加え電気代や洗剤、ティッシュなどの日用品代に消える。銭湯代や昼食代も自腹を切るようになった。なけなしの貯金で大好きなK-POPのライブに行った。

卒業後の進路希望は就職と伝えている。本当は美容系の専門学校を望んでいるが、2年で200万円近くかかる学費にたじろぐ。

学校 最後の砦

女性教諭は、定時制も含めて進学率の低い学校に長年勤めてきた。不登校や一家離散の家庭、進学を断念する生徒たちを目の当たりにしてきた。

教師の道を本気でめざしたきっかけは、教育実習先で休みがちだった女子生徒からもらった一言だ。「先生の励ましで、学校に行けるようになった」

学校は親から子への貧困の連鎖を断ち切る最後の砦だと思う。彼ら、彼女たちを見守り、しゃべり続けようとこの職に就いて、間もなく20年になる。

(石原孝)

自立求められ 働く生徒増

総務省の就業構造基本調査(2012年)によると、全国の高校生約386万人のうち約22万人がアルバイトをしていた。前回07年の調査より約2万人増え、男女別では女子が約5万人多かった。バイトを禁止している学校も多く、内密でバイトする生徒を勘案すれば、実数はさらに増えるとみられている。

放送大学の宮本みち子副学長(家族社会学)は「親が非正規の職にしか就けず、金銭面で自立を求められる高校生が増えている」と言う。特に女子は家庭を支える役目を期待されやすいという。

国は公立高校の授業料無償化のほか、都道府県とともに生活保護世帯などに奨学給付金を支給するが、定期代や制服代、教材費を全てカバーできるわけではない。進学を断念する生徒も多く、返済不要の給付型奨学金の拡充を求める声は根強い。

授業についていけず中退する生徒も少なからずおり、小中学校のカリキュラムの学び直しに力を入れ、やる気や自信を引き出そうとする学校が全国に広がっている。

子どもと貧困について、ご意見をお寄せください。メール(asahi_forum@asahi.com)か、〒104・8011(所在地不要)朝日新聞オピニオン編集部「子どもと貧困」係へ。